小沼丹作品集　Ⅲ

小沼丹作品集Ⅲ

定價三八〇〇圓

昭和五十五年四月二十日　初版發行

著　者　小沼丹

發行者　長谷川郁夫

發行所　株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二―五―十二　郵便番號一〇二

電話　東京（〇三）二六三―九二一八（代表）

印刷　精興社　製本　大口製本

裝釘　山高登

©T. Onuma, 1980　Printed in Japan

目次

懐中時計

黒と白の猫　9
タロオ　36
蟬の抜殻　54
揺り椅子　81
影繪　99
自動車旅行　123
懐中時計　139
ギリシャの皿　162

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

銀色の鈴
小徑 191
猫柳 218
山のある風景 235
古い編上靴 266
落葉 316
昔の仲間 334
銀色の鈴 362
解題 387

小沼丹作品集　Ⅲ

懷中時計

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

黑と白の猫

妙な猫がゐて、無斷で大寺さんの家に上り込むやうになつた。或る日、座敷の眞中に見知らぬ猫が澄して坐つてゐるのを見て、大寺さんは吃驚した。それから、意外な氣がした。それ迄も、不屈な無斷侵入を試みた猫は何匹かゐたが、その猫共は大寺さんの姿を見ると素早く逃亡した。それが當然のことである、と大寺さんは思つてゐた。ところが、その猫は逃出さなかつた。涼しい顔をして化粧なんかしてゐるから、大寺さんは面白くない。

——こら。

と怒鳴つて猫を追つ拂ふことにした。

大寺さんは再び吃驚した。と云ふよりは些か面喰つた。猫は退散する替りに、大寺さんの顔を見て甘つたれた聲で、ミャウ、と鳴いたのである。猫としては挨拶の心算だつたのかもしれぬが、大寺さんは心外であつた。

——おい、おい。

大寺さんは大聲で細君を呼んだ。その聲を聞くと、どう云ふものか、猫は面倒臭さうに立上つ

てゆつくり縁側から庭に降りて行つた。

——あの猫、どこの猫だ？

大寺さんは顔を見せた細君に訊ねた。猫は庭のポポの木に身體をこすりつけながら、縁側にゐる大寺さん夫婦を振返つた。

——さあ、どこの猫かしら？　この頃、ときどき上つて來るのよ。

——おい、つて呼ぶのを聞いたら出てつたぜ。妙な猫だ。

——あたしが猫嫌ひなの、判るんでせう。

——いやに落着き拂つてやがる。

——でも、あの猫、そんなに厭ぢやないわ。

——ふうん？

大寺さんは妙な顔をした。大寺さんの細君は昔から猫が嫌ひである。一度は猫が窓から覗いたと云つて、とんでもない悲鳴をあげたことがある。學校時代親しかつた友人の所にも、猫がゐると云ふ理由で敬遠して行かない。だから、大寺さんの家では犬は二度ばかり飼つたことがあるが猫には縁が無い。その細君が、その猫はそんなに厭ぢやないと云ふから、大寺さんは不思議に思つたのである。

——兎も角、怪訝しな猫だ。何しに來るんだらう？

大寺さんはポポの實が氣になつたから、庭に降りて、一つ、二つ、指で壓してみた。ポポの實は青く、まだ固かつた。大寺さんは序に猫の姿を探したが、もうどこにも見當らなかつた。

猫が何故上り込むか、その理由は間も無く判明した。三、四日して、細君が悲鳴をあげて大寺さんの所にやつて來た。大寺さんは苦苦し氣な顔をした。

——頓狂な聲なんか出すな。

——あら、御免なさい、と細君は笑ひ出した。あの猫が鼠を捕つたのよ。

——ふうん。

捕つた鼠を咥へて、細君の坐つてゐる直ぐ傍を通り抜けたから、細君は吃驚仰天して悲鳴を發したのである。猫が鼠を捕るのは當然のことかもしれぬが、他人の家に上り込んで鼠を捕る猫がゐるとは、大寺さんも考へなかつた。大寺さんの家には鼠がゐた。近所の家では大抵猫を飼つてゐるらしく、鼠共は大寺さんの家に避難所を見出してゐたのかもしれない。從つて、猫にとつては大寺さんの家は恰好の獵場だつたのかもしれない。

——鼠を捕りに來るなら、別に追つ拂はなくてもいい。

大寺さんは、その猫の出入を大目に見ることにした。

別に、その旨を猫に傳へた譯でも無いのに、猫の方は何やら心得顔に大寺さんの家に出入した。ときには、風のやうに這入つて來て茶の間にゐる細君を跳上らせた。しかし、猫は一向に恐縮した樣子も見せず、澄して臺所に行つて聽耳を立てたり、襖をがりがり引搔いたり、寢そべつたりした。

——まるで、自分の家にゐる氣でゐやがる。

大寺さんは氣に喰はないが、些か呆れぬ譯にも行かなかつた。

ときに細君が、こら、とか、しつ、と云つて猫を窘めることがある。しかし、猫は落着き拂つて、細君なぞ齒牙にも掛けぬ風情を示した。大寺さんの眼には、窘める細君の方が逃腰に見える。

――お前がびくびくするから、と大寺さんは細君に注意した。猫の奴がいい氣になるんだ。

――だつて、仕方が無いわ。

大寺さんと細君がそんな話をしてゐるとき、猫は素知らぬ顔でお化粧に餘念が無い。小柄な黑と白の猫であるが、黑が全體の三分の二ほどを占めてゐて、彼女は――因みにこの猫は女性であるが――人間にするとさしづめ巴里の御婦人ぐらゐには見えぬことも無い。さう思つて見ると、器量も滿更惡くないのである。現に、母親に似て猫の嫌ひな大寺さんの二人の娘も、

――あの猫、案外可愛い顔してるわね。

と云つたりした。

のみならず、その猫は行儀が良かつた。食卓の上に食物が竝べてある所に來合せても、見向きもしない。澄して通り過ぎて、横眼も使はない。無論、物欲し氣に坐り込むこともしない。これには大寺さんも感心した。

――この猫は行儀がいい。いい猫だ。

――あんまり讃めるといい氣になつてよ。

ところが、大寺さんが感心したのが、猫に聞えたのかもしれない。その后、大寺さんが庭に出てゐたら、猫が垣根を潜つて這入つて來ると、ミャウ、と鳴きながら庭下駄を突掛けた大寺さん

の足に身體をこすりつけた。何だか擽つたい氣がして、大寺さんは、

——おい、止せよ。

と云つて歩き出したが、猫はくつついて來て離れない。

——あら、面白いわね。

窓から細君が覗いて笑つた。すると、どう云ふものか、猫は大寺さんから離れて葡萄棚の柱に頭をこすりつけた。大寺さんは何となく、猫の心理が判るやうな氣がした。

猫と女は呼ばぬときに來る、と云ふのは追剝ドン・ホセの言葉だが、大寺さんは或る日、その文句を想ひ出した。郵便局迄行つた歸り、自宅の近く迄來たとき、大寺さんは例の猫が一軒の家の戸口に澄して坐つてゐるのを發見した。

——おい。

名前を知らぬから、大寺さんはさう呼んでみた。意外なことに、猫は知らん顔をして横を向いた。何だか莫迦にされた氣がするが、猫を相手に怒つてみても始らない。

家に戻つた大寺さんは、細君にこの話をした。

——あの猫の野郎、知らん顔してたぜ。

ところが、細君の話に依つて、猫の坐つてゐた家が彼女の飼主の家だと判つた。尤も、細君も最近になつて漸く飼主を知つたらしかつた。大寺さんの細君は胸が惡くて餘り出歩かない。自然、近所の事情にも疎いのである。

——ふうん、あの家の猫か……。

——あの奥さん、あの猫はもう勘當しましたの、なんて云つてたわよ。

——何故、勘當したんだ？

——知らないわ。

パリジエンヌは多分尻が輕いからだらう、大寺さんはさう解釋した。

——ときどき、鼠を咥へて上つて來るから困るとも云つてたわ。

——ははあ、うちの鼠だ。

——あたし、惡いから默つてたわ。

——惡いことは無い。

大寺さんは無責任なことを云つた。しかし、捕つた鼠を飼主の家に見せに行く所をみると、猫自身は勘當されたとは思つてゐないらしい。而も、大寺さんの家を我家と思つてゐるらしい樣子を露骨に示す所をみると、どうやら、猫は大寺さんの家を別莊ぐらゐに心得てゐるのかもしれなかつた。兎も角、他の猫と一緒に大寺さんの家の庭に這入つて來ても、自分だけ澄して緣に上り込む。大寺さんが見てゐるから、他の猫は垣根の近くで樣子を窺つてゐる。しかし、彼女は相棒なぞそつちのけで緣に寢そべり、脚や手を舐め始める。他の猫は恨めしさうな顏をして退散するのである。

大寺さんはこの猫に就いて、米村さんに話したことがある。米村さんは大寺さんと同じ學校に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com